

『日本書紀』訓点資料における漢語動詞形成漢字の意味と訓

——『古事記』の漢語動詞形成漢字の意味と比較して——

柚木 靖史

はじめに

『日本書紀』には、いくつかの訓点資料の諸本が伝存する。本稿で扱う『日本書紀』の訓点資料は、岩崎本、前田本、図書寮本、天理本、吉田本である。本稿では、漢語動詞成立の過程を考えると、この観点から、これら諸本における漢語動詞形成漢字（漢語動詞の語幹を形成する漢字）の訓の有りようについて考えてみたい。

本稿の筆者は、一字からなる漢語動詞を中心に、漢語動詞形成漢字の中国からの受容と日本におけるその後の意味の変遷、類義の和語動詞との使われ方の違いなどについて考えてきているが、加えて、訓点資料における訓読という観点も、漢語動詞の成立過程について考えるための重要な視座の一つに据えてきた。漢語動詞成立の過程において、漢文訓読が関わっているか、

関わっているとすればどのように関わっているかということについて、多くの訓点資料を対象とした確認と考察が必要である。

本稿で『日本書紀』の訓点資料を取り上げる理由は、かつて拙稿において『日本書紀』『古事記』の漢語動詞形成漢字の意味と『源氏物語』の漢語動詞の意味を比較したことがあるが、その際、『日本書紀』の漢語動詞形成漢字の意味と読みとの関係について、『日本書紀』の訓点資料を取り上げることができなかった。訓点資料は、その成立時期からすれば後代の資料ではあるが、『日本書紀』の漢語動詞形成漢字の読みを考えるには欠かせない資料である。また、『日本書紀』には、複数の訓点資料があり、それらの訓を比較することにより、漢語動詞形成漢字の読みと意味との関係について、多角的に捉え得ると考えたからである。

なお、本稿で取り上げる漢語動詞形成漢字は、『源氏物語』の一字漢語動詞の語幹をなす、次の三十五字である。

念／奏／誦／具／怨／屈／領／啓／調／制／請／信／臆／
興／困／講／孝／辞／拜／秘／弄／先／練／按／要／勘／
感／死／動／難／褶／服／用／論／和

これらの漢字が、『日本書紀』の諸訓点資料でどのように読まれ、それが漢語動詞成立とどのように関わるかを探るのが本稿の目的である。

なお、本稿で取り上げる『日本書紀』の訓点資料の概要は、以下のとおりである。

① 岩崎本（京都国立博物館蔵）⁽¹⁾

平安時代の十世紀の書写とされ、卷第二十二、卷第二十四が存する。石塚博士は、^(A)平安中期加点（朱点―仮名、ヲコト点、本文声点、合符等）と^(B)院政期中期加点（墨点―片仮名、卷第二十二のヲコト点、本文及び片仮名の訓声点、合符等、朱点―卷第二十四のヲコト点、合符等）と^(C)宝徳三年及び^(C)文明六年一条兼良加点、傍注頭注脚注墨書、返点、合点、合符等）に分けられた。

② 前田本（前田育徳会蔵）⁽²⁾

卷第十一、卷第十四、卷第十七、卷第二十の四卷が存する。十二世紀の書写、加点とされている。

③ 圖書寮本⁽³⁾

卷第十二、卷第十三、卷第十四、卷第十五、卷第十六、卷第十七、卷第二十一、卷第二十二、卷第二十三、卷第二十四が存する。これに、別本を取り合せた卷第二と卷第十から成る。「永治二年三月廿七日以彈正弼大江朝臣」の識語がある。書写、加点ともに「永治二年」と考えられている。

④ 吉田本（兼方本）（京都国立博物館蔵）⁽⁴⁾

卷第一、卷第二が存する。筆者は卜部兼方で、朱墨の訓点のほか、注記、裏書の書き入れが存する。鎌倉中後期の書写である。

⑤ 天理本（兼夏本）（天理大学付属天理図書館蔵）⁽⁵⁾

卷第一、卷第二が存し、乾元二年（一三〇三）に卜部兼夏が書写、加点したものである。

一 訓点資料諸本における漢語動詞形成漢字の訓と意味との関係

まず、訓点資料諸本において、一字漢語動詞形成漢字の訓についての一覧を本稿末の別表に示す。なお、先に示した一字漢語動詞形成漢字のうち、「按・臆・勘・具・困・難・褶・秘・練・弄」については、『日本書紀』の訓点資料諸本において、動詞としての使用例が認められなかった。

さて、論文末に掲げた別表に基づき、諸本間の訓の違いにつ

いて検討する。ただし、諸本によって、残存する巻に異なりがあるので、完全に比較することは難しい。したがって、まずは、諸本間の残存する巻数の異なりを考慮せずに考察を進める。

別表に基づき、一字漢語動詞形成漢字（以下、形成漢字と表記する）ごとに、訓の状況を概観する。なお、「屈」「誦」「調」は、『日本書紀』で動詞として使用されているものの、付訓例が認められないので、ここでは取り上げない。

以下、岩崎本を岩、前田本を前、図書寮本を図、吉田本を吉、天理本を天と表示する。

① 「念」

「オモフ」（岩・図）と「オボス」（図）がある。

「オモフ」「オボス」という異なる訓で読まれる理由は、用例1のように、天皇が主体のときは「オボス」と訓じ、用例2のように一般の人物が主体のときは、「オモフ」と訓じている。

1 天皇、使に御田を、其(の)采女を^{ヲカセリト}奸疑(ひ)て、将^{スラシクマハム}刑(と)自(ら)念^{コロサムトオボス}て、物部に付(ケタマフ)。

(図書寮本 371行目 第十四 雄略紀)

2 生の念^{ウミノコニ オモフコ、ロ}を不属(ケザラム)。(図書寮本 510行

目 第十四 雄略紀)

② 「奏」

動詞の訓としては、「マウス」（岩・前・図・吉・天）と「マス」（図）がある。「マウス」の訓が、すべての本に見られ、「マス」は図書寮本にのみ見られる。なお、「マス」は「マラス」の変化した語とされる。

用例1は、「奏」単独字を「マス」として読んだ例で、二格の対象は天皇である。用例2のように「マウス」と読んだ「奏」も、対象は天皇であることから、図書寮本で、「マウス」と読んだ「奏」と「マス」と読んだ「奏」の間に、意味の違いは認めがたい。用例2は、図書寮本で「奏」を「マウス」と読んだものの全10例のうち、1例を示した。

1 天皇之^{ミヤノミ}瘡、^{イヨク}転^{サカリナリ}盛^{ウセクヒナム}。終^{ハシ} (ト)将^{スル}欲^ク、時に鞍部^{クツククリ}多^{オホシ}(平)須^{ヒラ}奈^ナ(上)進^{シメ}(みて)而^{シテ}奏^{マウス}て曰^{イハレ}、(図書寮本 73行目 卷第二十一 用明紀崇峻紀)

2 群臣、議定て奏^{マウセ}之。(図書寮本 65頁 第十三 允恭紀 安康紀)

③ 「怨」

用例1、2のように「ニクム」（前・図）「ソネム」（前・図）が見られる。用例1、2は、同一本文の対応箇所であり、前田本、図書寮本ともに、「怨」に対して「ニクム」と「ソネム」の

訓を付し、いずれも右に「ニクム」、左に「ソネム」とある。前田本と図書寮本の同一系祖本の存在が考えられる。ここでは、同一箇所「怨」を「ニクム」と「ソネム」で読んでおり、「怨」の意味の違いによって読み分けているとは考えにくい。

1 於是小鹿火宿祢、大磐宿祢を深、ニクム右訓ソネム左訓怨乎。乃

四 258行目 雄略天皇
(ち) 於韓子の宿祢に告(げ)て曰(く)(前田本 卷第十

2 於是、小鹿火の宿祢、大磐宿祢を深、ニクム右訓ソネム左訓怨て、乃
(ち)、於韓子の宿祢に許むて曰(く)、(図書寮本 306行目

第十四 雄略紀)

④ 「領」

「ヒキキル」(前・図・天)「ウナガス」(前)「ヲサム」(図)の訓が見られる。用例1と2は、同一内容の箇所「領」であるが、異なる本で、いずれも「ヒキキル」として読んでいる。ここでの「領」は、「兵士を率いる」という意味である。用例3の「ウナガス」と読まれた「領」の意味は、新編日本古典文学全集の頭注によれば、「法令を頸枷にして、命令に従わない者を検挙し監督する意。」(②35頁)とある。用例4の「ヲサム」として読んだ「領」は「領有する」という意味である。このように、「ヒキキル」「ウナガス」「ヲサム」と読んだ「領」は意味が

異なり、その意味の違いに応じて異なる訓で読んでいる。

「ヒキキル」

1 太山守の皇子、其(の)兵(を)備タルことを知(ら)不(し)て、数百兵士を両領夜・半、モモアマリノイクサ ヒキキテヨナカニ タチテ発而行之。(前

田本 卷十一 40行目 仁徳天皇)

2 太山守の皇子、其(の)兵(を)備タルことを知(ら)不。独、数百兵士を領て、夜・半^{モモアマリノイクサ ヒキキ}発而行(く)之。

(吉田本 283行目 神代下)

「ウナガス」

3 不領而扶老。ウナカサレスシテ(前田本 卷十一 118 仁徳天皇)

「ヲサム」

4 天皇、即(ち)使を遣^{ツ(カハシ)}て而、上道の臣等を噴・讓て於

而、所領山部を奪(ふ)ヲサル(図書寮本 33行目 卷第十五 清寧紀顯宗紀仁賢紀)

⑤ 「啓」

「マウス」(岩・前・図・吉・天)「ミチヒラク」(吉)「ミチヒク」(天)の訓が見られる。用例1に示したように、「マウス」として読まれた「啓」は、いずれも臣下が貴人に「申し上げる」という意味である。用例2は「啓」を「ミチヒラク」として読んだ例である。

「マウス」

1 乃(ち) 四大夫、起・進(み)て、於大臣(に) 啓マ(ホ)マウス

(す)。(岩崎本 12紙270行目 卷二十二 推古天皇)

「ミチヒラク」

2 吾先て啓・行。ミチヒラクユカム(天理 卷第二 神代下 15紙13行目)

第九段一書第二)

⑥ 「制」

「カトル」(前・図)「ヤム」(吉・天)の訓が見られる。用例1は、「カトル」として読んでいる。「カトル」は、「自分の意のままにする」という意味で、ここでは領土を占有することと言う。用例2のように、同じ内容の箇所を他の本でも「カトル」と読んでいる。用例3の「制」は、「制止する」という意味で、これを「ヤム」として読んでいる。「ヤム」とは、「止める」という意味であろう。

「カトル」

1 長門より以・東をは朕、之を制。カトラム(前田本 卷十七 189

行目 継体天皇)

2 長門以・来をは、朕之を制。カトラム筑紫以・西をは汝制之。カトル

(図書寮本 99行目 卷十七 継体紀)

「ヤム」

3 於是、海神、制ヤヒメツて曰、イハレ(天理本 卷第二 神代下 42紙11行目 第十段一書第二)

⑦ 「請」

「マウス」(岩・前・図・天)「コフ」(岩・前・図・天)「マス」(岩・前・図)「ウケタマハル」(前)「ツカムマツル」(図)の訓が見られる。

用例1、用例2は、「マウス」として読んだ例である。用例1は、皇太子が主語で、二格の対象が天皇であり、用例2は、新羅の使者が主語で、二格の対象が朝廷である。いずれの「マウス」も「申し上げる」という意味の謙讓語である。用例3、用例4は、「請」を「マス」として読んだ例で、仏像や僧侶の将来を求めて、「うやうやしくお願い申し上げる」という意味を表している。「マス」は、「仏像や僧侶の将来など仏教に関わる願いごとを申し上げる」という意味で使われている。

「コフ」として読まれた「請」は、用例5、用例6のように、多く会話中に使われ、「お願いすることは、〜という内容です」という意味で使われている。用例7、用例8の「ウケタマハル」として読んだ「請」は、会話文中に使われ、天皇に対して、死罪につながるような罪過の重要な事項を質問し判断を仰ぐという意味を表す。用例9の「ツカムマツル」として読んだ「請」は、自分達の行為、すなわち降伏するという行為を遜って表現

している。

以上見てきたように、「請」の字は、文脈上の様々な意味に応じて、読み分けられている。

「マウス」

1 是(の)月、皇太子、于天皇(に) マウシ(朱) 請(て)以(て)

大・楯及 鞞 ユキ(墨) 此を是由(平)岐(平)と云。を作(り)

又于旗・幟二 ハタ(朱) 絵 エカク(朱)。(岩崎本 第5紙97行目 卷二

十二 推古天皇)

2 是(に)由て新羅改て其(の)上・臣伊叱夫礼智于岐を

遣(し)て新羅大臣を以て上・臣(と)為。一本云伊叱夫礼知奈

未衆三千を率て来て勅を聴(か)むと請。(前田本 卷第

十七 231行目 継体天皇)

「マス」

3 是歳蘇我の馬子宿祢其(の)仏像二軀を請て乃(ち)

鞍 クラツクリ 部の村・主司馬達等池辺の直氷田を遣(し)て於四方

に使(し)て修・行・者 オコナヒト を訪・覓(め)シむ。(前田本

卷二十 162行目)

4 因以て恵(平)隱(平)僧 ホシ を マセ(右訓)マナメ(左訓) 請(て)无(去)量

(平)寿(平)経を説(か)令(む)(図書寮本 148行目 卷

二十三 舒明紀)

「コフ」

5 請、勿 コフ ナミマシソ(右)マヒソ(朱・左) 視 ミ 之。(天理本 卷第一 神代上

17紙9行目 第五段 一書第六)

6 請、誠に使を遣シメて、其(の)消・息を觀(る)。「墨、

其(の)消・息を觀(に)使を遣(はしむ)。(岩崎本 第

17紙401行目 卷二十二 推古天皇)

「ウケタマハル」

7 伏願は大・王臣か女韓媛(と)葛城宅七区与を奉獻て

死罪を 贖 請(以)。(前田本 卷第十四 29行目 雄

略天皇)

8 故、更使・人并て謹(み)て磐日等を遣(せ)て、

臣 ヤツカレカ 使の来不(る)之意を請 ウケタマハル 問(しむ)。(前田

本 卷第二十 56行目 敏達天皇)

「ツカムマツル」

9 於是、新羅国の王、軍多に至(れり)と聞(き)て、

豫 ゾラフメ、之(を) 慥 オホツカムマツラムト 請 マフコハム。(図書寮本 437行

目 卷第二十二 推古紀)

⑧ 「信」

用例1のように、「ウク」(前・図)として読んだ例だけが見

られる。

「ウク」

1 是(に)由(り)て馬子宿祢、池辺の氷田、司馬達等、

仏の法をタモナシ保ホ、信ウケて、修オコヒスル行懈こと(ら)不。(前田本
卷第二十 174行目 敏達天皇)

⑨ 「興」

「オコス」(岩・前・図)「タツ」(岩・前・図)「ツクル」
(岩・前・図)「オク」(前)「アグ」(前・図)「オコル」(前・
図)の訓が見られる。

用例1、用例2に挙げた「オコス」として読んだ「興」は、
「奮い立たせる」という意味で、用例1のヲ格の対象は「衆の
心」で、用例2は「皇后の感ずる心」である。「オコル」は、用
例3のように、「中興」という二字熟語のうちの「興」を読んだ
例である。用例4のように、「オク」として読んだ「興」は「目
を覚まして起きる」という意味である。用例5のように「ツク
ル」として読んだ「興」は、「(建物を)造る」という意味であ
る。用例6、用例7の「タツ」と読んだ「興」も、「(建物を)
造る」という意味である。用例6、7ともに、「興」に対して右
に「タツ」として読んだ訓があり、左に「ツクル」として読ん
だ訓がある。このように、同じ意味と考えられる「興」に「ツ
クル」と「タツ」の訓があることから、「ツクル」と「タツ」の
訓は、意味による読み分けではなく、祖本の違いによる読みの
違いであると考えられる。用例8、9は、「アグ(グ)」として
読んだ例で、「言葉に出す」という意味である。本が異なっても、

同一本文の箇所「興」を「アグ(グ)」として読んでいる。
このように、「興」も、意味によって読み分けていることが分
かる。ただし、「ツクル」と「タツ」は、意味による読み分けて
はなく、祖本の訓を反映したものであろう。

「オコス」

1 因て、言(を)以(て)、隋の場ヤウ(去声)帝タイ(平声)
卅万ミツロツ(の)衆イクを興て、我を攻(む)。(岩崎
本 第15紙349行目 卷二十二 推古天皇)
2 皇后キコシメシ聞イサメマツリタマフ、悲(み)て、感ミオセヒ(を)興、心
止イサメマツリタマフ之。(圖書寮本 159行目 第十四
雄略紀)

「オコル」

3 繼ヲ・体之君に及(り)乎て、中・興之オカロオコル功イタハ者立(て)む
と)欲(て)、曷(か)嘗オホムより賢・哲ノ之謨・謀に乎頼
(ら)不む。(前田本 卷十七 245行目 繼体天皇)

「オク」

4 於是、天皇、夙オキ(に)興、夜・寝て賦ミツキを輕(て)、斂オホムを
薄オホム(く)しで、以(て)民・萌オホム寛ミツキ、徳布イキホヒ(き)、
恵を施クルシクシ(し)て以(て)困・窮振。死を弔(ひ)、
問(ひ)以(て)孤ヤモヤモ孀ヲサ養ヲサ(ふ)。(前田本 卷第十一
360行目 仁徳天皇)

〔ツクル〕

5 九年春二月皇太子初て宮・室を斑・鳩于（に）
興ツクリタマフ。

〔圖書寮本 65行目 卷第二十二 推古紀〕

〔タツ〕

6 九年の春二月、皇太子、初て、宮・室を于斑・鳩に
興ミヤ思ミヤ朱。

〔岩崎本 第3紙61行目 卷
二十二 推古天皇〕

7 天皇、更に宮・室を於河内の茅渚（に）
興タテ（右調）ツクリテ（左調）而、

衣通姫を令居ハヘラシム。〔圖書寮本 145行目 第十三 允恭紀
安康紀〕

〔アゲ〕

8 言を興て此を念に、唯以て恨を留（む）。〔前田本 卷十
四 424行目 雄略天皇〕

9 言を挙て此を念（ふ）に、唯以て恨を留（む）〔圖書寮本
507行目 第十四 雄略紀〕

⑩ 〔講〕

用例1のように、「トク」（岩）として読んだ訓だけが見られ
る。

1 秋七月、天皇、皇太子を請て、勝（平）鬘（去）
を講ト（朱）トカ思シメタマフ（思）令。〔岩崎本 第8紙186行目 卷二十二
經

推古天皇）

⑪ 〔孝〕

用例1のように、「オヤニシタガフ」（図）として読んだ訓だ
けが見られる。

1 今此を以（ち）て報は、不亦孝。〔圖書寮本
229行目 卷第十五 清寧紀顯宗紀仁賢紀〕

⑫ 〔辞〕

「イナブ」（前・図）「ユヅル」（図）として読んだ訓が見られ
る。「イナブ（ブ）」として読んだ「辞」は、「（依頼を）断る」
という意味である。用例2のように、「譲る」という意味の
「辞」を「ユヅル」として読んでいる。

〔イナブ〕

1 猶辞（て）而、不聴（ず）。〔圖書寮本 23行目 第十
三 允恭紀安康紀〕

〔ユヅル〕

2 遂に与に于遊・田（を）盤て、一の鹿を駈・遂て、
相、箭（を）発辞て、轡を並て馳・騁。〔圖書
寮本 卷十四 128行目 雄略紀〕

⑬ 「拝」

「キヤフ」(岩)「マク」(岩)「メス」(岩・図)「ウヤマフ」(岩)「ヲガム」(岩・図・吉)「コトヨス」(図)として読んだ訓が見られる。用例1は、同一の「拝」に、朱筆で「キヤフ」、墨筆で「キヤフ」「ウヤマフ」として読んだ訓がある。同じ意味の「拝」に「キヤフ」と「ウヤマフ」という別の訓が付されており、意味の違いによって読み分けたとは考えにくい。祖本の違いによって、「拝」の読みが異なると考えられる例である。なお、ここでの「拝」の意味は、「尊敬する」である。用例2は「メス」として読んだ例で、ここでの「拝」の意味は「任命する」である。用例3は、同一の「拝」に「マク」(墨)、「メス」(墨・朱)として読んだ別の訓が付された例である。「拝」の意味は、「任命する」である。「マク」「メス」とともに、「任命する」の意味があり、同一の「拝」であることから、「拝」の意味の違いによって読み分けたのではなく、祖本にある別の訓を書き入れたと考えられる。用例4は、「拝」を「ヲカム」として読んでいる。「拝」の意味は、「礼拝して謁する」という意味である。用例5は、「拝」を「コトヨス」として読んだ例である。ここでの「拝」も「任命する」という意味であるが、同じ意味の「メス」は、二格を取るが、「コトヨス」はヲ格をとる。すなわち、「メス」は役職に焦点が当てられ、「コトヨス」は人物に焦点が当てられる。

以上見てきたように、「拝」にはいくつかの異なる読みがあるが、それらは「拝」の意味の違いによって読み分けられている。ただ、「キヤフ」と「ウヤマフ」は、同じ「拝」に付されており、祖本の影響を受けていると考えられる。

「キヤフ／ウヤマフ」

1 故、群・臣共に為に心を竭^{ツクシ}て、宜ク神祇
キヤヒマツル^朱キヤヒマツル^{墨・左}ウヤマフ^{墨・左}
を 拝 (ベ)シ(岩崎本 第9紙)

193 行目 卷二十二 推古天皇

「メス」

2 三年の春正月の乙亥の朔に、中臣の鎌子の連を以て、神祇^{ツカサ(墨・左)}の伯^{カミ(朱)カミ(墨・左)}に 拝^{メス(墨・左)}す。(岩崎本 9紙204行目)

卷二十四 皇極天皇

「マク／メス」

3 則(ち)大・臣の男善^{コホセ(墨)}(平)・徳^{ト(墨)}(入)臣を以て、寺の司^{マケム(墨・右)メ(朱)メス(墨・左)}に 拝^{メス(墨・左)}す。(岩崎本 第2紙34行目)

卷二十二 推古天皇

「ヲガム」

4 丁酉、客等、朝・庭^{ミカト(墨・右)}(を) 拝^{ヲカム(墨・右)}。(岩崎本 12紙214行目)

目 卷二十二 推古天皇

「コトヨス」

5 便(チ)、自(ラ)稚媛を求(メ)て女・御^{ヒメ}ト為給(ト)

欲す。^{オホ}田狹^{コトヨサセ}を^{ミマナクニノミ}拜^{トキサテ}て任那の国の司に為給^(ふ)。(図書寮本 210頁 第十四 雄略紀)

⑭ 「先」

用例1のように、「サキタツ」(図・天)として読んだ訓だけが見られる。

「サキダツ」

1 於是、^{ヒトリ}一の衛士有て疾馳^{サキタチヌ}て方に先^{サキ}。(図書寮本 137頁 卷第二十一 用明紀崇峻紀)

⑮ 「要」

「カタム」(岩・図・吉)が見られる。用例1は、「要」を「カタム」と読んだ例で、「約束を取り決める」という意味である。

「カタム」

1 中^{ナカタチ}臣^ミの鎌子^{キハコ}連^ミは、即^ナ(ち)自^ミ(ら)往^{ユル}て^{ナカタチ・ミ・右・ナカタチ・墨・左・墨・右・カタム・ミ・ムルコト・墨・右・カタメ・墨・左}要^要 訖^訖ヌ^{墨・右}。

(岩崎本 10紙227行目 卷二十四 皇極天皇)

⑯ 「感」

「カマク」(岩)「メグム」(岩)「タケル」(前・図)「メヅ」

(前・図)「マク」(図)「ナゲク」(図)が見られる。

用例1は、「カマク」として読んだ例である、ここでの「感」の意味は、「感動する」という意味である。また、用例2のように、他の本では、同一本文の「感」に対して、「カマク」の他に「メヅ」として読んだ訓も付される。用例3も、同一の「感」に「カマク」「メヅ」として読んだ訓が付された例である。「カマク」と「メヅ」は意味も類似しており、「感動する」という意味の「感」に対しては、「カマク」「メヅ」という異なる訓が存したことになる。「カマク」と「メヅ」は「感」の意味による読み分けではなく、祖本の読みの違いを反映していると考えられる。用例4は、「感動する」という意味の「感」に「メヅ」として読んだ訓だけが付された例である。用例5は、「メヅ」「タケル」として読んだ例で、ここでの「感」も「感動する」という意味である。ただし、内容は、大亀が突然女性の姿に変わる様子を見て、浦嶋子を感じたということなので、「感動する」という意味の「メヅ」の他に「心が乱れる」という意味として「タケル」の訓を当てたのかもしれない。なお、用例6のように、同一本文の他の本でも、「感」に「メヅ」「タケル」として読んだ二つの訓を付している。用例7は、「嘆く」という意味の「感」を、「ナゲク」と読んだ例である。

このように「感」は、意味としては「感動する」と「嘆く」という意味があり、「感動する」という意味の「感」は、「カマ

用例1は、「死ぬ」という意味の「死」を「マカル」として読んだ例である。主語は保食神で、天照大神が保食神を看護するために天熊人を派遣した時には、保食神はすでに死んでいたという内容である。用例2は、「ミマカル」として読んだ例である。

天皇の発言で、公の使者は死をもって任務を遂行すべきであるという天皇の発言である。主語は、公の使者であり、ここでは唐書を百済に奪われた小野妹子を指す。

用例3は、「死」を「ウス」として読んだ例である。ここでの「死」も「死ぬ」という意味である。主語は、山背大兄王である。また、用例4のように、「ウス」にも「ミウス」の例がある。主語は、来朝した屋久島の人々である。「マカル」も「ウス」も「死ぬ」という意味であるが、「マカル」の主語が神や公の使者であるのに対して、「ウス」は敵対する王などであることから、「マカル」の方が「ウス」より敬意を含めた意味を表すと考えられる。

用例5は、「シヌ」として読んだ例である。主語は、多くの国民である。「シヌ」は、「死」を表す直接的な表現であり、禁忌のためその使用が避けられたと考えられている。ここでは、一般的な人々の死を述べており、禁忌に当たらないと考えて、「シヌ」という語を使ったのであろうか。「シヌ」は、尊敬の意の接頭辞「ミ」や尊敬の補助動詞「タマフ」とともに使われない。用例6からは、用例5と同一内容の本文を、他の本でも、「シヌ」と読んでいることが分かる。ただし、用例7、8のように、同一箇所「死」を、「シヌ」とも「マカル」とも読んだ例もあることから、訓読する人の意識によって、「シヌ」と「マカル」は置き換えることもできたことが分かる。

用例9の「シス」は漢語動詞である。ここでは、「身内に死者があると、父母、兄弟といった親族であっても死者を見ない」という新羅や百済の風習を述べ、それでは「禽獣と同じである」と評する。異国の人の死であり、特別な風習にのっとった死のあり方を表現するために、漢語動詞を使用したのであろうか。漢語動詞としては唯一の例である。

用例10は、「ヲフ（追ふ）」と読んだ例である。ここでの「死」も「死ぬ」という意味であるが、兄の菟道稚郎子が弟の大鷦鷯尊に帝位を譲ろうとして自死したという内容であり、父である先帝の応神天皇に讓位を報告するためであったという。ここでは、先帝の死を追うという意味で、「ヲフ」と読んだと考えられる。

用例11は、「スグ（過ぐ）」と読んだ例である。ここでの「死」も「死ぬ」という意味であるが、敏達天皇の死を表しており、「シヌ」を表す直接的な表現は使わず、婉曲的表現である「スグ」として読んだと考えられる。

用例12は、「カクル（隠る）」と読んだ例である。「隠る」も「過ぐ」と同様に、「死ぬ」という直接的な表現を避けるために多用される語である。「死」を「カクル」と読む例は、神代下と神代下のみに現れる。ここでは神々の「死」に対して、「カクル」で読んでいる。「神」の死に対して、「シヌ」のような直接的な動詞で読むことは避けたのであろう。直接的な表現を避け

天皇

「スク」

11 何の故にカ^{スギカマヒシキミ}死^{ツカマツリ}王之庭に^{タヒラカニマス}事^{右タヒラ}て、生^左王之所に^{ミミト}事^{ツカマツラ}弗^{セラム}。(前田本 卷二十 210行目 敏達天

皇)

「カクル」

12 則(ち)、夫^{カフ}天稚彦ノ已に^{タル(右)ことを朱・ヲコト忌カクレタルコトヲ(左)}死^知(り)て乃(ち)疾^{ハ(平)ヤ(平)チ(平)ニ}・風遣て「御統不可読之^{カハネ}戸^{アケ(右)}を^知舉^{カハネ}て」天に^{イタラシム}到^{モ(右)モカリ(左)}(らし)む。「以下不可読也^{ヤ(左)}使^{モ(右)モカリ(左)}喪^{ヤ(左)}・屋を造(り)而て^{モ(右)カ(上)リ(上)ス}殯^{之。}之。(吉田本 47

行目 神代下)

「コロス」

13 然、大恩(メクミ)を垂(タレタマヒ)而て、死(コロ

スツミ)を免(ユルシ)て墨(ヒタヒキサムツミ)を科

(オホセ)て、(図書寮本 78行目 卷第十二 履中紀反正

紀)

⑩ 「動」

「ウゴカス」(岩)「ワナナク」(岩)「オコル」(図)として読

んだ訓が見られる。

用例1の「動」は、「移動する」という意味で、これを「ウゴカス」として読んでいる。用例2の「動」は、「震える」という

意味で、これを「ワナナク」として読んでいる。用例3のように、同じ内容の箇所を、他の本でも「ワナナク」と読んでいる。用例4の「動」は、「発生する」という意味で、これを「オコル」と読んでいる。このように「動」には、その意味の違いに応じて複数の読みが存する。

「ウゴカス」

1 於^{ツカサ}墓^所に(り)、而見レ(朱)は(朱・ヲコト点)之封^{カタ(朱)カタメ(墨)右調カタメ(墨)左調}・^{ウ(朱)ウツムシトコ(墨)右調ウツメルコト(墨)左調}・^封埋^封動^{ウゴカス(墨)・右調} 勿^{ウコカス}す(朱・ヲコト点) (岩崎本 第14紙 329行目 卷

二十二 推古天皇)

「ワナナク」

2 倉山田麻呂、臣、表^{フミ(墨)・右調}・文^{ヨミアク(朱)ヨミアク(墨)左調}を^{オクル(墨)・左調}唱^唱将に(朱・ヲコト点) 尽^{ツキ(朱)・右調ツキナト(墨)・左調}「^{スレトモ(墨)・左調}将^将」而子麻呂等来不(る)を恐(れ)て、^{イッル(朱)イッル(墨)・左調}流^流・汗身に^{汗身に}浹^{アマナク(朱)アマナク(墨)・右調}て、声^{ミタル(墨)・右調}乱^{ワナナク(朱)ワナナク(墨)・左調}・手^手動^動。

(岩崎本 第14紙 313行目 卷二十四 皇極天皇)

3 倉山田麻呂臣^{ヨミアクルフミ}唱^唱・表^表・文^文・将^将尽(きむとして)而、子麻呂等、来不(る)を^{イッルアセ}て流汗身に浹て声乱(れ)手動^{ワナナク}。

(図書寮本 299行目 卷第二十四 皇極紀)

「オコル」

4 是(の)日、大臣の病、動^{オコリ}(て)以て^{イノアタリ}面^面於^於桜井臣

(に) 言(う) こと能(は) 不。(図書寮本 21行目 卷第二十三 舒明紀)

⑬ 「服」

「シタガフ」(岩)「マツロフ」(岩・図)「キル」(岩・前・図)
「ウベナフ」(天)の訓が見られる。

用例1の「服」は、「降伏する」という意味で、岩崎本ではこれを「シタガフ」「マツロフ」として読んでいる。「シタガフ」は右訓で「マツロフ」は左訓である。これは、祖本の読みを書き記したのであろう。用例2のように、「降伏する」の意味の「服」を、岩崎本では「シタガフ」として読み、用例3のように図書寮本では、「マツロフ」として読んでいる。このことから、「シタガフ」と「マツロフ」は、「服」の意味によって読み分けられていると言えない。用例4は「着る」という意味の「服」を「キル」と読んだ例である。また、用例5のように、同じ内容の箇所「服」を、別の本でも「キル」と読んでいる。用例6の「服」も、用例1のように「降伏する」という意味であるが、「ウベナフ」として読んでいる。文脈から「同意する」という意味だと判断して「ウベナフ」として読んだのであろうか。あるいは、「シタガフ」「マツロフ」は、神の行為としてはふさわしくない語であると考え、「マツロフ」を選んだのであろうか。用例7にあるように、同じ内容の箇所の「服」を、別の本でも

「ウベナフ」と読んでいる。

このように、「降伏する」の意味の「服」は「シタガフ」「マツロフ」「ウベナフ」と読まれ、このうち「シタガフ」と「マツロフ」は、読み分けの基準が不明である。「着る」という意味の「服」は、「キル」として読んでいる。

「シタガフ／マツロフ」

1 多(平)・多・羅(平)、素(平)奈(平)
ラ(平・右調)ホツ(平・右調)チ(平・右調)キ(平・右調)
羅(平)弗(入)知(平)・鬼(平)、
委(平)陀(平)、南(平)の加(平)・羅(平)、
阿(去)・羅(上)・羅(上)・六(平)城(平)を割て、
服(シタガム(平・右調)／マツロハムト(平・左調)む(朱・ヲコト点)請(岩崎

本 第3紙53行目 卷二十二 推古天皇)

「シタガフ」

2 新羅罪を知(り)て服(シ(朱)シタガ(平・右調)之。(岩崎本 第3紙

53行目 卷二十二 推古天皇)

「マツロフ」

3 多(平)多(平)羅(平)・素(平)奈(平)羅(平)・弗(入)知(平)鬼(平)、委(平)陀、南(平)の加(平)羅(平)、
阿(去)羅(上)羅、六の城を以(て)服(マツロハムト)請(ふ)(図
書寮本 56行目 卷第二十二 推古紀)

「キル」

4 其(れ) 農(せ) 不(は)、 何(ナレ) (本ナニヲカラハム墨・左調) 食、 桑 (クワトラ)
不(は)、 何、 服 (む・朱・ラコト忌キム墨・右調)。(岩崎本 第7紙19行目)

卷二十二 推古天皇

5 其農(ナリハヒ) (せ) 不(は)、 何(ナレ) 食(カ) 桑(セ) 不(は)、 何(か) 服(キ) (ナレ)。(圖書寮本 160頁 卷二十二 推古紀)

「ウベナフ」

6 故加、 倭、 文神(を) 遣セハ、 建葉槌(タケハツチ) の命を者は、 則 (マタ シツリカミ)
(ち) 服。(吉田本 104行目 神代下) (ウヘナヒス)

7 故加、 果 倭、 文神(を) (マタ イ元・朱・モツイニ墨・左シテツツ(平)リ(平)断(平)延平(平)養平(平)ヒカ平(平)ミ平)

遣セハ、 建葉槌(の) 命を者は、 則(ち) 服。(天理本 卷第二 神代下 7紙9行目) (ウヘナヒス)

②① 「用」

「トル」(吉・天)「モチキル」(天)の訓が見られる。

用例1の「用」は「起用する」という意味で、これを「トル」として読んでいる。用例2の「用」は「使用する」という意味で、これを「モチキル」として読んでいる。ここでは、素戔嗚尊が草薙剣を私に使用することという。

「トル」

1 于時に、権に、他、婦を用、乳を以て皇、子を養焉。
(吉田本 693行目 神代下) (カリ アタシヨミナ左 トリ ミ ヒタス)

「モチキル」

2 此、以て吾か私に用可不(るなり)也。(天理本 卷第一 神代上 53紙14行目 第八段 一書第四)

②① 「論」

「アゲツラフ」(岩・図)のみが見られる。「論」は「議論する」という意味である。

「アゲツラフ」

1 必(ず) 衆 与、 宜ク(墨・右調) 論フ(墨・右) (モ(ロ)モ(ロ)(朱)ト墨・右調)
訓「宜」べし(岩崎本 第7紙155行目 卷二十二 推古天皇)

②② 「和」

「アマナフ」(岩・前・図)「ヤワラグ」(岩)「コタフ」(図・吉・天)の訓が見られる。

用例1の「和」は「同意する」という意味で、これを「アマナフ」として読んでいる。用例2の「和」は「唱和する」という意味で、これを「ヤワラグ」として読んでいる。ただし、ここでは「穏やかになる」という意味に解して「ヤワラグ」と読んだとみられる。用例3の「和」は「返答する」という意味で、これを「コタフ」と読んでいる。

このように「和」の読みは、「同意する」「穏やかになる」「返答する」といったような意味の違いに応じて、異なる読み方がなされている。

「アマナフ」

- 1 而、玖賀媛、不^{アマナハス}和^{ハス}。(前田本 卷十一 162行目 仁徳天皇)

「ヤワラグ」

- 2 天皇^{ヤワラケ皇・右訓}和^{ハス}て曰、(岩崎本 第13紙289行目 卷二十二 推古天皇)

「コタフ」

- 3 陽神、後に和^{コタヘ}之て曰(く)、(吉田本 99行目 神代上)

二 『古事記』の漢語動詞形成漢字の意味との比較

『古事記』の本文をどのように読んだかということは、古い訓点資料が無いいため、厳密には定かではない。そのようななかにあつて、小林芳規博士が説かれた訓漢字という考えかたは、注目される。すなわち、『古事記』を表記する漢字を詳細に調べられ、『古事記』に使われる漢字が、一語につき原則一漢字であることを指摘され、これを訓漢字と名付けられた。⁽⁶⁾このことは、本節の考察結果からも裏付けることができる。

ここでは、漢語動詞形成漢字という観点から、前節で示した『日本書紀』の形成漢字の訓と意味との関係を踏まえて、『古事記』の漢語動詞形成漢字の意味と訓と比較した。ただし、先に述べたように『古事記』には、中古中世の訓点資料がないので、訓は『古事記総索引』の訓を参考とした。⁽⁷⁾

次に示すのは、『古事記』の形成動詞の意味と訓を列挙したものである。

- ① 念 (意味) 思う (訓) オモフ
- ② 奏 (意味) 天皇に申し上げる (訓) マラス
- ③ 怨 (意味) 恨む (訓) ウラム
- ④ 領 (『古事記』に用例なし)
- ⑤ 啓 『古事記』に用例なし
- ⑥ 制 (意味) 領土を治める (訓) ヲサム
- ⑦ 請 (意味) 神のお告げや天皇や母君の指示や許しを求める (訓) コフ／マラス

「コフ」「マラス」は併記される。よって「コフ」と「マラス」は読み分けられていないと考えられる。

- ⑧ 信 (意味) 信じ込む (訓) ウク
- ⑨ 興 (意味) 行為を始める (訓) オコス
- (意味) 軍勢を集める・軍を率いる・軍を整える (訓) オコス
- (意味) 波を起こす (訓) オコス

- ⑩ 講 『古事記』に用例なし
- ⑪ 孝 『古事記』に用例なし
- ⑫ 辞 (意味) 辞退する (訓) イナム
- ⑬ 拝 (意味) 拝み祭る 参拝する 礼拝して謁する (訓)
イツク／ヲカム／ヲログム／マツル (「拝伊勢神宮」
とある箇所のみ、「マツル」と読み、他は「ヲガム」
「ヲログム」の訓が中心で、「イツク」「ヲガム」を併
記したところもある。)
- ⑭ 先 『古事記』に用例なし
- ⑮ 要 『古事記』に用例なし
- ⑯ 感 (意味) 心が動く 心が奪われる (訓) メツ
- ⑰ 死 (意味) 死ぬ (訓) マカル／シヌ／カムサリス／ウ
ス／イノチスゲ／コロス
- ⑱ 動 (意味) 震え鳴り響く (訓) トヨム／ユスル／ウゴク
動 (意味) 変化する (訓) ウゴク
動 (意味) 移動させる (訓) ウゴカス
「トヨム」「ユスル」とあるところは、「ウゴク」も
併記される。
- ⑲ 服 (意味) 着る (訓) キル

- ⑳ 用 (意味) 使う (訓) モチキル
- ㉑ 論 (意味) 議論する (訓) アゲツラフ
- ㉒ 和 いずれも「平和」「和平」という熟語形式で使用する。
- これらを見ると、『古事記』の漢語動詞形成漢字は、一つの漢
字に一つの訓が対応する例が多い、それは、『古事記』の漢語動
詞形成漢字の意味が、ほぼ一つに限定されることを意味する。
なお、㉑の「請」には「コフ」と「マラス」があるが、いずれ
も「申し上げて指示や許しを求める」という意味であり、例え
ば「マラス」という一つの読みだけで読んでいくことも可能で
ある。また、⑱の「動」にも、「トヨム」の他に、「ウゴク」と
「ウゴカス」があるが、「ウゴク」「ウゴカス」ともに、「震える」
の意味を含むので、「トヨム」と読むことも可能である。
- これに対して『日本書紀』の漢語動詞形成漢字の意味と訓点
資料の訓の関係をみると次のように、異なる意味で使われるこ
とがあり、それぞれに異なる訓が付されている。
- ① 念 『日本書紀』『古事記』ともに「思う」という意味であ
る。ただし、『日本書紀』は、尊敬語として「オボス」と
読んだ例がある。
- ⑥ 制 『日本書紀』では「領有する」「制止する」という意味
で使用され、『古事記』では「領有する」という意味で使

用される。

- ⑨ 興 『日本書紀』には、「発生する」「起きる（目覚める）」「建てる・造る」「言葉に出す」という複数の意味があり、それぞれ「オコル」「オク」「ツクル」「タツ」「アグ」と読んでいる。これに対して『古事記』には、「行為を始める」「軍勢を集める・軍を率いる・軍を整える」「波を起こす」という意味があり、いずれも「オコス」という共通した訓で読むことが可能である。

- ⑫ 辞 『日本書紀』には、「辞退する」と「譲る」という意味があり、それぞれ「イナブ」「ユヅル」と読んでいる。これに対して『古事記』には、「辞退する」という意味だけがある。

- ⑬ 拝 『日本書紀』には、「尊敬する」「任命する」「礼拝して謁する」という意味があり、それぞれ「キヤマフ」「メス／コトヨス」「ヲガム」と読んでいる。これに対して『古事記』は、「拝み祭る」「参拝する」「礼拝して謁する」という意味があるが、これらは基本的には同じ意味として考えられ、例えば「ヲロガム」といった同じ訓で読むことができる。

- ⑭ 感 『日本書紀』には、「感動する」「心が乱れる」「嘆く」という意味があり、それぞれ「カマク／メヅ」「タケル」「ナゲク」と読んでいる。これに対して『古事記』の

「感」は、「感動する」という意味だけが存し、『古事記総索引』では、全て「メヅ」と読んでいる。

- ⑰ 死 『日本書紀』『古事記』ともに「死ぬ」という意味がある。『日本書紀』は、「シヌ」を避けて、死の主体や場面によっては「ウス」「スグ」等に読み分けている。『古事記』の「死」にも複数の訓があり、主体や場面によって読み分けたことが想定できる。

- ⑱ 動 『日本書紀』の「動」は、「動く」「震える」「発生する」という意味で、それぞれ「ウコク」「ワナナク」「オコル」と読んでいる。これら三つの意味は異なることから、それぞれの「動」を同じ訓で読むことは難しい。これに対して、『古事記』の「動」には「震え鳴り響く」「変化する」「移動させる」という意味があるが、「震え鳴り響く」とは、大地が動くという意味で解釈することもでき、「変化する」とは、生命の場所が動くことで死の状態になることと解釈することもできる。したがって、『古事記』の三つの意味はすべて「動く」という意味で解釈することができ、『古事記総索引』の「動」の読みも、一部に「トヨム」の訓もみられるが、それでも「ウゴク」の訓が併記されているように、すべて「動く」「動かす」という意味で解釈することができる。

- ⑲ 服 『日本書紀』には、「降伏する」「着る」という意味があ

り、それぞれ「シタガフ／マツロフ／ウベナフ」「キル」と読んでいる。『古事記』は、「着る」という意味のみで、たとえば、「キル」という訓ですべて読むことができる。

- ②⑤ 用 『日本書紀』には、「起用する」と「使用する」という意味があり、それぞれ「トル」と「モチキル」と読んでいる。『古事記』には、「使用する」という意味だけがあたり、例えば、「モチキル」という訓で読むことができる。

- ②⑥ 和 『日本書紀』には、「同意する」「穏やかになる」「返答する」という意味があり、それぞれ「アマナフ」「ヤワラグ」「コタフ」と読んでいる。『古事記』には、熟語形で用いられた「和」しかなく、「和平」「平和」という形で「平定する」という意味である。

このように、『日本書紀』の漢語動詞形成漢字は、一つの漢字に対して複数の異なる意味が存し、それに対応して異なる意味を持つ訓が対応している。つまり、『日本書紀』の漢語動詞形成漢字は、意味による読み分けがなされていることが分かる。これは、小林博士が説かれた訓漢字という考え方を、『日本書紀』の訓との比較からも裏付けられたことになる。一方、『日本書紀』には、同じ意味を表す漢語動詞形成漢字に対して複数の訓が存する例もある。その最も顕著な例は、同一本文に対して、点本によって訓が異なる場合である。これは、祖本の読みの違

いを反映していると考えられ、漢語動詞形成漢字の意味の違いと訓とが対応するわけではなく、家点によって異なる訓が存したことを示す。また、「念」には主体の違いによって「オモフ」と「オボス」の訓が存するように、「思う」という共通する意味を持つ「念」であっても、訓としては主体の違いによる読み分けが存する。また、「死」は、主体の違いや死の有りようによって「シヌ」「シス」「ヲフ」「スグ」「カクル」と読んでいるなど、「死ぬ」という共通する意味を持つ「死」字の意味を文脈に応じて細かく捉え、異なる読み方をしている。

『日本書紀』と比較し得るような訓点資料が『古事記』に無いのが残念であるが、恐らく『古事記』を訓読するとすれば、『日本書紀』より単純であったことが予想される。それは、もともと『古事記』の漢語動詞形成漢字が、それぞれ一つの訓で読めるように表記されるという、表現上の工夫がなされていることによる。一方、『日本書紀』の場合は、一つの形成漢字が複数の意味を持つことがあり、意味の異なる形成漢字を異なる訓で読み分けている。したがって、『日本書紀』の点本は、その訓によって、内容理解が深まることになる。この点からして、『日本書紀』にとって、訓読という行為は、重要な意義を持っていたと考えられるのである。

おわりに

本稿では、『日本書紀』の複数の訓点資料を取り上げ、漢語動詞形成漢字の読みを、意味との対応という面から考察した。その結果、『日本書紀』の漢語動詞形成漢字は、複数の意味で使用されているものがあり、その複数の意味に応じて、異なる訓が付されている。これは、『古事記』の用字法と比べると、その違いが顕著である。

本稿の課題は、『日本書紀』の漢語動詞形成漢字の意味と訓の關係に注目し、その成立の過程を訓点資料の加減状況から読み解くことが可能かどうかを確認することにあつた。『日本書紀』の訓点資料を見た場合、まず、漢語動詞で読まれることが無いということが、大きな特徴である。これは、恐らくは、日本語の漢字表記において、漢語動詞の使用がまだ一般的でなかった上代に成立したということに起因しているのであろう。和語動詞読みとして作られた和書としての『日本書紀』の訓を、後代の訓点資料も踏襲しているのであろう。これは、例えば、中国成立の漢文を読んだ『白氏文集』の訓点資料のような、漢語動詞が訓読に入り込む余地が大きい訓点資料とは、大きな違いがある。そのことを考えると、漢語動詞の成立には、漢文や仏典を対象に行われた訓読という翻訳行為が大きく関わっている

ものと推測できるのである。

(別表『日本書紀』訓点資料諸本における漢語動詞形成漢字の訓)

制	信	誦	辞	死	講	孝	興	啓	屈	具	感	怨	
				ミカクル／ マカル／ミ ウス／ミマ カル／シマ ス／シス／ウ	トク		ヲコス／タ ツ／ツクル	マウス	キヤフ		カマク・メ グム		岩崎本
			イナブ	シヌ／オ フ／スグ			タツ／ツク ル／オク／ オコス／ア グ／オコル	マウス	屈請(イマ ス)		タケル／メ ヅケル／メ	ニクム／ソ ネム	前田本
			イナブ／ユ ヅル	シヌ／コロ ス／ウス		オヤニシタ ガフ	タツ／オコ ス／オコル ／アグ／ツ クル	マウス	ツツシム	ソナフ	タケル／メ ヅ／マク／ ナゲク	ニクム／ソ ネム	図書寮
				シヌ／カク ル／マカル				マウス／ミ チヒラク					吉田
				シヌ／カク ル／マカル				マウス／ミ チビク					天理

請	先	奏	調	動	念	拝	服	用	要	領	論	和
マス／マウ ス／コフ		マウス	トル／ミツ	ウゴカス／ ワナナク	オモフ	マク／メス ／キヤフ／ ラガム／ウ ヤマフ	シタガフ／ マッロフ／ キル		カタム		アゲツラフ	アマナフ／ ヤワラゲ
マウス／ウ ケタマハル ス／コフ／マ ル		マウス					キル			ヒキキル／ ウナガス		アマナフ
コフ／マウ ス／マス／ ツカムマツ	サキダツ	マウス／マ	ス	オコル	オモフ／オ ボス	ラガム／コ トヨス／メ ス	キル／マツ ロフ		カタム	ヒキキル／ ヲサム	アゲツラフ	コタフ／ア マナフ
		マウス				ラガム		トル	カタム		コタフ	
コフ／マウ ス	サイダツ	マウス					ウベナフ	モチキル／ トル		ヒキキル		コタフ

- (1) 『岩崎本日本書紀 国宝』(京都国立博物館所藏／京都国立博物館 編 勉誠出版、二〇一三年)
- (2) 『日本書紀』(前田育徳会尊経閣文庫編、二〇〇二年)
- (3) 『日本書紀 圖書寮本』(石塚通孝著、美季出版社、一九八〇年—一九八四年)

- (4) 『国宝吉田本日本書紀』（京都国立博物館所蔵／京都国立博物館編 勉誠出版、二〇一四年）
- (5) 『日本書紀 乾元本』（天理大学附属天理図書館編集、天理大学出版部、二〇一五年）
- (6) 「古事記 音訓表（上）（下）」（小林芳規著『文学』第四十七卷 第八号第十一号昭和五十四年八月・十一月）『日本思想大系 古事記』（小林芳規著 青木和夫・石母田正・佐伯有清著 第一卷岩波書庖昭和五十七年）
- (7) 『古事記総索引』（高木市之助、富山民藏編 平凡社、一九七四—一九七七）なお、底本は、『校定古事記』（明治四十四年 皇典講究所）とされる。